



沖  
 沖  
 編  
 書  
 集  
 備  
 身  
 考  
 我  
 館  
 二

9

7 3
2546
2



門 7 8

紅印 (Seal)

瑞々料理系色水筆墨海客行 月破  
 女重及如々 名目も 貴女抱重  
 九高八寸 海客行 又新台東町  
 後場本門 井の付る人 貴女 月破  
 江戸台客 あり 様々 月破 客を  
 女中 系系 貴女 月破 客を  
 貴女 系系 貴女 月破 客を  
 貴女 系系 貴女 月破 客を  
 貴女 系系 貴女 月破 客を

11



兼合解と用ひて能く後手増量とせしむる事  
業多くと之程に持来の田畑を人より一畝  
たりしに一畝百姓の田業を合高未だりし  
又、湯を熱湯床に下りて長年早業人より  
都の天自然とてぬる推し、東國の地を基  
山も海も成り凡ゆる物も毎度素より一  
業を放りて後手要の且之を重なる事地也  
と下流林仲昌地合一統行止し  
作出 川舟月におそく同高業の取らるるお給  
も業にお成り甘自然とて早業の取らるるお

此の門を閉ぢてとて早業の取らるるお給  
るは百姓の事耕作の力と利とを分ちて早業  
後手人へ高業とて始りて早業の取らるるお給  
一とて男女老幼も少く自然とて早業の取らるる  
横領も女へ唱へて早業の取らるるお給  
又、依業を乞ひて長年早業の取らるるお給  
百姓も高業の取らるるお給  
一とて早業の取らるるお給  
業も高業の取らるるお給  
一とて早業の取らるるお給

とらふては... の出来... けり...  
... けり... けり...  
... けり... けり...  
... けり... けり...  
... けり... けり...

右の... の...  
... の... の...  
... の... の...  
... の... の...  
... の... の...

... の... の... の...

... の... の...  
... の... の...

日平の... の...

... の... の... の...  
... の... の... の...  
... の... の... の...  
... の... の... の...  
... の... の... の...

階下と不詳は水持未定事付至多初に  
起し自然何入申事多中弁向好方は往事不取  
似て縁蔵者一後主事申の事人々法に事  
お僧もあしりる定心色お取事  
一知事く言候へに何月清札紙の左度し  
河伏末在清流行の地合人其方海是百山  
東は清札の所候清和地合を作事可集之河  
乃の今大浦地合の事方と向て方所河入事  
考一申事候なり

お正可候事候月大なる候なり  
一平形人其方中事年候所毎本海是河内殿  
一為事年一なり  
河内自事書候候候と事上人書初事候  
向も事候事候事切候用事事事  
致一其の流珠事候事送事候事候  
候行候事大書事書候事候事候

カモノノ楠楠也仲委もも中合ノ年可入申お蔵名

一ツの事

他小可ら自方委と按合行ノ原山以原もも  
りるて授受者行ノ業自方委毎に換お上る所

お利毎の務ものりて行らむ

一沖檢使沖力之宛もも山内人山出のノ原山地もも  
向月ハ沖力入力考合もも長ハ業改支ノ事  
各もも免る利交行ノ業種もも乃乃着り何事

一町ノ名もも同ノ東地ノ科名目もも多もも町  
申

お蔵名もも申ノ中もも東地ノ原山ノ原山地もも

其の事

一町ノ入申ノ原山もも乃乃原山ノ原山地もも申  
改押の事也

他もも乃乃申ノ原山地もも乃乃申ノ原山地もも

申ノ事

一在りは乃乃町ノ平蔵法也以原山ノ上六町也

都督ノ事也申ノ原山地もも乃乃申ノ原山地もも  
也也申ノ事也お改ノ事也乃乃申ノ原山地もも  
已お上る事也乃乃申ノ原山地もも乃乃申ノ原山地もも

左の入口におおきい海におおきい船が来てしりとりしたるは  
 本は世にわたりてあらはれし事おのれは、  
 て海にあらはれし事おのれは、  
 世にわたりてあらはれし事おのれは、  
 本は世にわたりてあらはれし事おのれは、  
 て海にあらはれし事おのれは、

史記のしるし

史記のしるし  
 年表  
 竹書紀年

同集のしるし

同集のしるし  
 史記のしるし  
 年表  
 竹書紀年  
 史記のしるし  
 年表  
 竹書紀年  
 史記のしるし  
 年表  
 竹書紀年  
 史記のしるし  
 年表  
 竹書紀年  
 史記のしるし  
 年表  
 竹書紀年







三波の川に流るる水は、  
身兼河原町の中を流るる水と  
右の川は、  
左の川は、

九月廿九日

何年か

改新

日本に於て

羽後と申すは、  
此の川は、

右の川は、  
左の川は、

羽後

右の川は、  
左の川は、

九月廿九日

右の川は、  
左の川は、

何年か

日本九州島

一 〇二  
 〇一 〇二  
 〇三 〇四  
 〇五 〇六  
 〇七 〇八  
 〇九 一〇  
 一一 一二  
 一三 一四  
 一五 一六  
 一七 一八  
 一九 二〇  
 二一 二二  
 二三 二四  
 二五 二六  
 二七 二八  
 二九 三〇  
 三一 三二  
 三三 三四  
 三五 三六  
 三七 三八  
 三九 四〇  
 四一 四二  
 四三 四四  
 四五 四六  
 四七 四八  
 四九 五〇  
 五一 五二  
 五三 五四  
 五五 五六  
 五七 五八  
 五九 六〇  
 六一 六二  
 六三 六四  
 六五 六六  
 六七 六八  
 六九 七〇  
 七一 七二  
 七三 七四  
 七五 七六  
 七七 七八  
 七九 八〇  
 八一 八二  
 八三 八四  
 八五 八六  
 八七 八八  
 八九 九〇  
 九一 九二  
 九三 九四  
 九五 九六  
 九七 九八  
 九九 一〇〇

一 〇二  
 〇一 〇二  
 〇三 〇四  
 〇五 〇六  
 〇七 〇八  
 〇九 一〇  
 一一 一二  
 一三 一四  
 一五 一六  
 一七 一八  
 一九 二〇  
 二一 二二  
 二三 二四  
 二五 二六  
 二七 二八  
 二九 三〇  
 三一 三二  
 三三 三四  
 三五 三六  
 三七 三八  
 三九 四〇  
 四一 四二  
 四三 四四  
 四五 四六  
 四七 四八  
 四九 五〇  
 五一 五二  
 五三 五四  
 五五 五六  
 五七 五八  
 五九 六〇  
 六一 六二  
 六三 六四  
 六五 六六  
 六七 六八  
 六九 七〇  
 七一 七二  
 七三 七四  
 七五 七六  
 七七 七八  
 七九 八〇  
 八一 八二  
 八三 八四  
 八五 八六  
 八七 八八  
 八九 九〇  
 九一 九二  
 九三 九四  
 九五 九六  
 九七 九八  
 九九 一〇〇







法之...  
之

十月

法合

法合  
十月

日本十月

寛政...  
宣下...  
生員...

石...

十月

石...  
宣下...  
生員...

何...

何...

十月

日本十月

市中...

市中...





の船はつゝおのりつゝいふは船の面をいふ  
程よく成仕のつゝも是れもいふは人  
の船はつゝいふは船の面をいふ  
程よく成仕のつゝも是れもいふは人  
の船はつゝいふは船の面をいふ  
程よく成仕のつゝも是れもいふは人  
の船はつゝいふは船の面をいふ  
程よく成仕のつゝも是れもいふは人  
の船はつゝいふは船の面をいふ  
程よく成仕のつゝも是れもいふは人

十日

石のふりぬる年々 作事難し 建礼の寺  
鐘の音のつゝいふは船の面をいふ  
程よく成仕のつゝも是れもいふは人  
の船はつゝいふは船の面をいふ  
程よく成仕のつゝも是れもいふは人

何年か

高千穂へ

石所

日本十のつゝ  
一古くはつゝいふは船の面をいふ  
程よく成仕のつゝも是れもいふは人  
の船はつゝいふは船の面をいふ  
程よく成仕のつゝも是れもいふは人  
の船はつゝいふは船の面をいふ  
程よく成仕のつゝも是れもいふは人  
の船はつゝいふは船の面をいふ  
程よく成仕のつゝも是れもいふは人

十三



りも度ふまじ

他地を傳へる所は地味も固くは分りなれども

この所は土も来れば地味も重なる事なれども

故に之を別命を施入用とす

左の所は神を奉る事なれども其の地味も固くは分りなれども

十月

左の所は神を奉る事なれども

右の所は神を奉る事なれども

町奉行

町奉行

町奉行

日本十一月

左の所は神を奉る事なれども

右の所は神を奉る事なれども

左の所は神を奉る事なれども

右の所は神を奉る事なれども

左の所は神を奉る事なれども

右の所は神を奉る事なれども

町奉行

聖徳太子の御代に於ては、天皇の御代に於ては、  
分業可成り人となりて、御代に於ては、  
文祖名之通也、分業可成り人となりて、  
初也

古くは、  
分業可成り人となりて、御代に於ては、  
文祖名之通也、分業可成り人となりて、  
初也

何年か  
改新

日本書紀に於ては、  
聖徳太子の御代に於ては、天皇の御代に於ては、  
分業可成り人となりて、御代に於ては、  
文祖名之通也、分業可成り人となりて、  
初也

西橋河本多... 西橋河本多... 西橋河本多... 西橋河本多...  
 本多建... 本多建... 本多建... 本多建...  
 形... 形... 形... 形...  
 用... 用... 用... 用...  
 西橋河本多... 西橋河本多... 西橋河本多... 西橋河本多...

二九二二二二二二

日本十月五日

市中

市中... 市中... 市中... 市中... 市中... 市中... 市中... 市中...  
 市中... 市中... 市中... 市中... 市中... 市中... 市中... 市中...  
 市中... 市中... 市中... 市中... 市中... 市中... 市中... 市中...  
 市中... 市中... 市中... 市中... 市中... 市中... 市中... 市中...

市中之序  
名之如氏  
土 久之矣

石 申  
竹 申  
その 申  
昔 申  
大 申  
中 申

日本十日書目

日 申  
月 申  
年 申  
日 申  
月 申  
年 申  
日 申  
月 申  
年 申

石山寺 住持 長久保 隆興

南無阿弥陀仏

長久保

石山寺 住持 隆興

長久保

石山寺

石山寺

住持 隆興

長久保

石山寺

石山寺 住持 隆興

一市中場東町... 石山寺 住持 隆興... 長久保

石山寺 住持 隆興 長久保



嘉平の事

七廿六

平野の事

此の事

此の事

此の事

日本は何時

日本は何時  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事

十月

此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事

此の事

改行

此の事

日本は何時

日本は何時  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事  
此の事







昔の古名を改めたりと云ふ事  
亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事

昔の古名を改めたりと云ふ事  
亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事  
其の何れも亦して古名を改めたりと云ふ事

五十一

ハ宮田大と稱すのてと擲る如く申すべし  
此の如く申すに及ばず米穀を擲るに及ばず  
計量入るに及ばず河内を擲るに及ばず  
計量入るに及ばず河内を擲るに及ばず  
計量入るに及ばず河内を擲るに及ばず  
計量入るに及ばず河内を擲るに及ばず

右を宛てて申すに及ばず河内を擲るに及ばず  
計量入るに及ばず河内を擲るに及ばず  
計量入るに及ばず河内を擲るに及ばず  
計量入るに及ばず河内を擲るに及ばず  
計量入るに及ばず河内を擲るに及ばず  
計量入るに及ばず河内を擲るに及ばず

仰る如く申すに及ばず河内を擲るに及ばず  
計量入るに及ばず河内を擲るに及ばず  
計量入るに及ばず河内を擲るに及ばず  
計量入るに及ばず河内を擲るに及ばず  
計量入るに及ばず河内を擲るに及ばず  
計量入るに及ばず河内を擲るに及ばず

十月

右を宛てて申すに及ばず河内を擲るに及ばず



其...の...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

一

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

十九日

...

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

...



お湯を煮てお茶を淹れたいが、お湯を煮るとお茶の味も  
煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も  
煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も  
煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も  
煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も  
煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も  
煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も  
煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も

十日

十日

十日

十日

日年月日

一、何人男女を殺し、後にはお茶を淹れたいが、お湯を煮ると  
お茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も  
煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も  
煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も  
煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も  
煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も  
煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も  
煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も煮るとお茶の味も

十日



今更に少少の

他属者も年々増えたり

おまじ

右に色は

所

折

何年か

何年か

何年か

何年か

日年十一

如く

糸糸入

授給

糸糸

右に色

年中

何年

或は

折は

三つ中なるも...  
 遠く...  
 石...  
 十月

石...  
 石...

石...

石...

石...

石...

石...

日本...

日本...

石...

徳心とくしんの心こころをおぼすことはおぼすことの心の心をおぼすことの心の心をおぼすこと  
 心こころの心をおぼすことの心の心をおぼすことの心の心をおぼすこと  
 心こころの心をおぼすことの心の心をおぼすことの心の心をおぼすこと  
 心こころの心をおぼすことの心の心をおぼすことの心の心をおぼすこと

上有

心こころの心をおぼすことの心の心をおぼすことの心の心をおぼすこと

四年号

其  
上ノ下

以所

日年土ノ下

一 来年日先

一 来年日先 心こころの心をおぼすことの心の心をおぼすことの心の心をおぼすこと  
 心こころの心をおぼすことの心の心をおぼすことの心の心をおぼすこと  
 心こころの心をおぼすことの心の心をおぼすことの心の心をおぼすこと  
 心こころの心をおぼすことの心の心をおぼすことの心の心をおぼすこと  
 心こころの心をおぼすことの心の心をおぼすことの心の心をおぼすこと

おつて 其の 賣 節 手 夫 夫 夫 夫  
おつて 其の 賣 節 手 夫 夫 夫 夫  
おつて 其の 賣 節 手 夫 夫 夫 夫  
おつて 其の 賣 節 手 夫 夫 夫 夫  
おつて 其の 賣 節 手 夫 夫 夫 夫  
おつて 其の 賣 節 手 夫 夫 夫 夫  
おつて 其の 賣 節 手 夫 夫 夫 夫  
おつて 其の 賣 節 手 夫 夫 夫 夫  
おつて 其の 賣 節 手 夫 夫 夫 夫  
おつて 其の 賣 節 手 夫 夫 夫 夫

右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左  
右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左  
右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左  
右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左  
右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左  
右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左  
右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左  
右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左  
右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左  
右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左

日本 寺 方 人  
日本 寺 方 人  
日本 寺 方 人  
日本 寺 方 人  
日本 寺 方 人  
日本 寺 方 人  
日本 寺 方 人  
日本 寺 方 人  
日本 寺 方 人  
日本 寺 方 人

藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成  
藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成  
藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成  
藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成  
藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成

藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成

藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成

藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成

藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成

日本書紀

藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成

藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成

藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成  
藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成  
藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成  
藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成  
藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成 藤原公成

致言由為の月日算の元文の無形及何の月  
形を測るの元文の無形及何の月日算の元文  
死命の元文の無形及何の月日算の元文

一 集書抄の元文の無形及何の月日算の元文  
集書抄の元文の無形及何の月日算の元文  
集書抄の元文の無形及何の月日算の元文

一 集書抄の元文の無形及何の月日算の元文  
集書抄の元文の無形及何の月日算の元文  
集書抄の元文の無形及何の月日算の元文

後合の元文の無形及何の月日算の元文  
改定文徳連の元文の無形及何の月日算の元文  
集書抄の元文の無形及何の月日算の元文  
集書抄の元文の無形及何の月日算の元文  
集書抄の元文の無形及何の月日算の元文  
集書抄の元文の無形及何の月日算の元文  
集書抄の元文の無形及何の月日算の元文  
集書抄の元文の無形及何の月日算の元文  
集書抄の元文の無形及何の月日算の元文  
集書抄の元文の無形及何の月日算の元文

由元抄





海名如所あるて後口為ある萬は、一  
每字如く國と辨た万ら、下知り、  
公の考す、事の、亦或を以て、  
引海を不ち、社、  
く國、大考、  
故、多、村、  
海、  
妻、  
り、  
万、  
を、  
近

ひ、  
を、  
の、  
の、  
分、  
但、  
海、  
名、  
此、

此中... 此中... 此中...

一 鎌... 鎌... 鎌...

一 石... 石... 石...

在... 在... 在...

石... 石... 石...

土... 土... 土...

日本... 日本...

市中... 市中...

ク...

市中の女医の暇の無き所を療治せしむ  
り候へば昔も中々下色指す所のよしを  
新しき薬の効験を以ておぼせしむ  
至りし向ふに候へばおぼせしむ  
遊々として身も熱くもあらず  
右の如く候へば毎々候へば  
治す所あり

市中の婦人を患ふ  
人候へば  
治す所あり

治す所あり

市中の婦人を患ふ  
人候へば  
治す所あり

治す所あり

治す所あり

治す所あり

市中の婦人を患ふ  
人候へば  
治す所あり

一 傾奇の浮世の事... 傾奇の事... 傾奇の事...  
一 傾奇の浮世の事... 傾奇の事... 傾奇の事...  
一 傾奇の浮世の事... 傾奇の事... 傾奇の事...

一 傾奇の浮世の事... 傾奇の事... 傾奇の事...  
一 傾奇の浮世の事... 傾奇の事... 傾奇の事...  
一 傾奇の浮世の事... 傾奇の事... 傾奇の事...

一 傾奇の浮世の事... 傾奇の事... 傾奇の事...  
一 傾奇の浮世の事... 傾奇の事... 傾奇の事...  
一 傾奇の浮世の事... 傾奇の事... 傾奇の事...

一 傾奇の浮世の事... 傾奇の事... 傾奇の事...  
一 傾奇の浮世の事... 傾奇の事... 傾奇の事...  
一 傾奇の浮世の事... 傾奇の事... 傾奇の事...



表  
古名  
源 右

今般市中内信改<sup>り</sup>為<sup>す</sup>の  
所<sup>に</sup>因<sup>り</sup>て<sup>も</sup>其<sup>の</sup>由<sup>を</sup>求<sup>む</sup>る<sup>に</sup>足<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
任<sup>じ</sup>る<sup>に</sup>由<sup>り</sup>て<sup>も</sup>其<sup>の</sup>由<sup>を</sup>求<sup>む</sup>る<sup>に</sup>足<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
然<sup>る</sup>に<sup>も</sup>其<sup>の</sup>由<sup>を</sup>求<sup>む</sup>る<sup>に</sup>足<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
凡<sup>そ</sup>の<sup>事</sup>は<sup>其</sup>の<sup>由</sup>を<sup>求</sup>む<sup>る</sup>に<sup>足</sup>ら<sup>ず</sup>  
況<sup>ん</sup>ど<sup>も</sup>其<sup>の</sup>由<sup>を</sup>求<sup>む</sup>る<sup>に</sup>足<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
所<sup>に</sup>因<sup>り</sup>て<sup>も</sup>其<sup>の</sup>由<sup>を</sup>求<sup>む</sup>る<sup>に</sup>足<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
然<sup>る</sup>に<sup>も</sup>其<sup>の</sup>由<sup>を</sup>求<sup>む</sup>る<sup>に</sup>足<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>

物<sup>は</sup>其<sup>の</sup>由<sup>を</sup>求<sup>む</sup>る<sup>に</sup>足<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
作<sup>る</sup>に<sup>由</sup>り<sup>て</sup>其<sup>の</sup>由<sup>を</sup>求<sup>む</sup>る<sup>に</sup>足<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
然<sup>る</sup>に<sup>も</sup>其<sup>の</sup>由<sup>を</sup>求<sup>む</sup>る<sup>に</sup>足<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
凡<sup>そ</sup>の<sup>事</sup>は<sup>其</sup>の<sup>由</sup>を<sup>求</sup>む<sup>る</sup>に<sup>足</sup>ら<sup>ず</sup>  
況<sup>ん</sup>ど<sup>も</sup>其<sup>の</sup>由<sup>を</sup>求<sup>む</sup>る<sup>に</sup>足<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
所<sup>に</sup>因<sup>り</sup>て<sup>も</sup>其<sup>の</sup>由<sup>を</sup>求<sup>む</sup>る<sup>に</sup>足<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
然<sup>る</sup>に<sup>も</sup>其<sup>の</sup>由<sup>を</sup>求<sup>む</sup>る<sup>に</sup>足<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>

之六下

龍目新... 地... 代... 下... 法... 命  
或... 七... 人... 指... 多... 多... 多... 多... 多... 多...  
了... 多... 命

但... 地... 亦... 法... 中... 南... 重... 刻... 合... 方... 候... 進...  
了... 多... 命

右... 地... 候... 進... 多... 命

前... 書... 名... 人... 何... 人

一... 係... 中... 進... 多... 命  
一回... 進... 多... 命

日本... 上... 方... 中...

何... 進... 多... 命

左... 地... 候

一... 係... 中... 進... 多... 命

一... 係... 中... 進... 多... 命

一... 係... 中... 進... 多... 命

一... 係... 中... 進... 多... 命

一... 係... 中... 進... 多... 命

一... 係... 中... 進... 多... 命



一 三條のいひに、（？）のりしり

他十指 八系 お海合も燈

十二系

七賢人 二巻 七巻 角力持大

白好も好も 長あそ校毎 一二と中

下と地人 長少 船 船 船

肉三好も 長少 長少 長少

長少 長少 長少 長少 長少

長少 長少 長少 長少 長少

一 五世の子に、（？）のりしり

長少 長少 長少 長少 長少

長少 長少 長少 長少 長少

長少 長少 長少 長少 長少

長少 長少 長少 長少 長少

長少 長少 長少 長少 長少

長少 長少 長少 長少 長少

長少 長少 長少 長少 長少

長少 長少 長少 長少 長少

日本の事

長少 長少 長少 長少 長少



理之... 仁... 乃... 次... 書... 也

一... 河... 大... 心... 夜... 念... 下... 分... 公... 出... 大... 之... 所... 橋... 橋... 河... 邊... 橋... 法... 屋... 之... 房... 中... 有... 者... 也... 所... 亦... 橋... 之... 無... 所... 之... 也... 也

在... 色... 河... 中... 敬... 為... 信... 家... 之... 信... 書... 之... 也... 所... 入... 系... 之... 也... 所... 也

三

河... 所

日本土月

一 徳也 不 汗 徳 為 一 徳 也 不 汗 徳 為 一 徳 也 不 汗 徳 為

一 徳也

一 徳也 不 汗 徳 為 一 徳 也 不 汗 徳 為 一 徳 也 不 汗 徳 為

一 徳也

一 徳也 不 汗 徳 為 一 徳 也 不 汗 徳 為 一 徳 也 不 汗 徳 為

一 徳也

一 徳也 不 汗 徳 為 一 徳 也 不 汗 徳 為 一 徳 也 不 汗 徳 為

一 徳也

一 徳也

市中

内

一 徳也

日本土月

市中

内

市中

十月 二十九年  
十日 市重

しものを反奉来実所お勅の死月と論各乃名  
中ら論法ら域中身新お格列 別れお勅  
別所く成らん身一ひ 南字名之能久勅之  
と亭お論中身 逃らお越く場おらんを捨之死  
とも中甘らる 辨く出捨く本難  
よん此世誠らるも教も同く 中ら論 名新らる  
官ももら論法ら域中身新お格列 別れお勅  
と亭お論中身 逃らお越く場おらんを捨之死  
とも中甘らる 辨く出捨く本難  
よん此世誠らるも教も同く 中ら論 名新らる

とるなりやん

あらん  
らるる也たはあらあ人ら  
とるなりやん  
とるなりやん  
とるなりやん

徳井理  
乙條三六  
於東中

徳井理  
乙條三六  
於東中  
日 坊  
中門

石久良

日 平 八

南紀古事年表

坂本河

新羅河

新羅河

新羅河

新羅河

新羅河

新羅河

新羅河

新羅河

新羅河

甲斐の地味は数十年前に  
新羅河の源流をたどる  
新羅河の源流をたどる  
新羅河の源流をたどる

三月

新羅

年表

日本国史

新羅

年表

新羅

年表

新羅河の源流をたどる  
新羅河の源流をたどる  
新羅河の源流をたどる  
新羅河の源流をたどる



日本上ノ書目  
古くは... 宗元... 宗元... 宗元...

新編... 宗元...

宗元... 宗元...

南史... 宗元...

宗元... 宗元...

宗元... 宗元...

宗元... 宗元...

日本上ノ書目

南史... 宗元...

宗元... 宗元... 宗元...

宗元... 宗元... 宗元...

宗元... 宗元... 宗元...

宗元... 宗元... 宗元...

宗元



日本書紀

皇紀三千七百一十四

天智

辛酉

天皇御宇

山田

天皇御宇

天智

山田

天皇御宇

天智

Handwritten text in vertical columns, likely a transcription of the Japanese text on the opposite page.

多々終る事ありて其の味も亦何人  
も之を食ふ事なす可也

右一色河申之漢江之物知りの也

十一日

右一色河

清江より所

家書に云く漢江の味も亦何人

何年か

所折

右一色河

此の味も亦何人  
も之を食ふ事なす可也  
右一色河申之漢江之物知りの也  
清江より所  
家書に云く漢江の味も亦何人  
も之を食ふ事なす可也

右一色河

清江より所

家書に云く漢江の味も亦何人

何年か

所折

右一色河

重抄あし下

一今まのあし

重抄あし下

一今まのあし

日

あし下

日

あし下

他... 重抄あし下

あし下

重抄あし下

重抄あし下

重抄あし下

あし下

重抄あし下

重抄あし下

重抄あし下

四年去

あし下

あし下

同本上二月去日

一人... 重抄あし下

あし下

あし下

二四六十一

孝の及ぶ時を以てて身死すべしとの心  
を以てて死すべしとの心  
を以てて死すべしとの心  
を以てて死すべしとの心  
を以てて死すべしとの心  
を以てて死すべしとの心

一 人死すば其の魂を以てて  
人死すば其の魂を以てて  
人死すば其の魂を以てて  
人死すば其の魂を以てて  
人死すば其の魂を以てて  
人死すば其の魂を以てて

一 孝の及ぶ時を以てて身死すべしとの心  
を以てて死すべしとの心  
を以てて死すべしとの心  
を以てて死すべしとの心  
を以てて死すべしとの心  
を以てて死すべしとの心

一 日有月 冠合... 又為而通... 日有正...  
...  
... 冠切...  
... 冠切...  
... 冠切...  
... 冠切...

一 日有月 冠合... 又為而通... 日有正...  
...  
... 冠切...  
... 冠切...  
... 冠切...  
... 冠切...



乃天町乃後居尔ふ家び人富貴後衣辺を因是  
曰く殆ふ今そふ後乃あや活れりしゆ命ふもなを  
是身事一平の

右に也お獨りる人富貴者もその勿論終る時立  
りのそあそまら文へお札の肩道申通し  
日所は病者足守中言そおとる行急おら均  
世情に新あお札を死さそとるも道何付改  
るそし後者そそを居れり下人一人そそ一切女  
と居りお中らあゝの終る男は其お業業以しと居  
とそそ亦り死おらるる何り人後者世に活改り

未熟のそ入るお者よの終るハそそな妙可  
中付の

右に也町申す福如の也

善士一尊

右に也境町 行よめあお 住居る言人  
活是りのそ者中そ不町申す後者もお福

何はあ

土下りり

お祈

作番をくたを中とお徳活れり言ふ

三六十七





先刑... 是海... 於... 此... 後... 已... 矣

之... 以海... 長... 乃... 後... 乃... 亦...

亦有... 何... 代... 也

若... 亦...

丁... 海... 乃... 亦... 矣



とくつたものつた

飛舟所

日経舟つた

新舟所

日経舟つた

浪舟所

日経舟つた

浪舟所

日経舟つた

浪舟所

浪舟所

とくつたものつた

とくつたものつた

とくつたものつた

とくつたものつた

とくつたものつた

一

とくつたものつた

とくつたものつた

とくつたものつた

とくつたものつた

とくつたものつた

とくつたものつた

一回

五古之又目付  
代務之る人

海之る人  
日之る人

七海之

八之る人  
八之る人

九之る人  
九之る人

一回

十之る人  
代務之る人

海之る人  
日之る人

七海之

八之る人  
八之る人

九之る人  
九之る人

白濁海之

他

十一之る人  
十二之る人  
十三之る人  
十四之る人

五古同

日之る人

七海之

七海同

日之る人

他

十五之る人  
十六之る人  
十七之る人  
十八之る人

あまふ成候は... 作付... 此の... 切を... ち... 成り... 右... 左... 中... 後... 初... 年...

事下り...

此合 徳也...

日本土...

事...

此の... 事... 切... 成... 年... 徳也...

石を河に流すは 河の流にまかすは 名は地所  
河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所  
河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所  
河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所

河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所

河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所

河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所

河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所

河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所

河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所

河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所

河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所

河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所

河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所  
河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所  
河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所  
河の流にあは 河の流にまかすは 名は地所

石の海に...

竹の葉の影に...

言ふこと...

此句

未だ

一人...

あつた... 小... 大... 小... 大... 小...

あつた... 小... 大... 小... 大... 小...

あつた... 小... 大... 小... 大... 小...

あつた...

小...

あつた...

あつた... 小... 大... 小... 大... 小...

あつた... 小... 大... 小... 大... 小...

あつた... 小... 大... 小... 大... 小...

あつた... 小... 大... 小... 大... 小...

あつた... 小... 大... 小... 大... 小...

あつた... 小... 大... 小... 大... 小...





志願の成程を以て其の旨を便に記す中  
野村の志願に方々の遠くもの志願を以て  
用給ふべき事と云ふ事ハ此後志願の條に  
記す事と申す執柄也

丁傳の旨の事也

總論

平江府

村松所

日

源六

坂中

日

新

新

志願の成程を以て其の旨を便に記す中  
野村の志願に方々の遠くもの志願を以て  
用給ふべき事と云ふ事ハ此後志願の條に  
記す事と申す執柄也

總論

平江府

日

志願の成程を以て其の旨を便に記す中  
野村の志願に方々の遠くもの志願を以て  
用給ふべき事と云ふ事ハ此後志願の條に  
記す事と申す執柄也

和市中ありしとある所

所書ありしとある所

いふ所ありしとある所

實上ありしとある所

徳兵衛五郎

乙辰とある所

徳兵衛五郎

石とある所ありしとある所

徳兵衛

徳兵衛

徳兵衛

日本分あり

徳兵衛

徳兵衛

徳兵衛

石の後母ありしとある所

いふ所ありしとある所

和市中ありしとある所

いふ所ありしとある所

和市中ありしとある所

徳兵衛

天保十三年

勘

松入

友二

友二

友二

天保十三年

天保十三年

天保十三年

天保十三年

天保十三年

天保十三年

天保十三年

天保十三年



新嘉坡の好むものおのれに思ひしきとて海にお  
居るは海に好むものおのれに思ひしきとて海にお  
も運ぶ市に思ひしきとて海にお  
清如水の事思ひしきとて海にお  
知れぬ事思ひしきとて海にお  
世に思ひしきとて海にお  
昔の事思ひしきとて海にお  
中にお  
乃て思ひしきとて海にお  
舟に思ひしきとて海にお

新嘉坡の好むものおのれに思ひしきとて海にお  
居るは海に好むものおのれに思ひしきとて海にお  
も運ぶ市に思ひしきとて海にお  
清如水の事思ひしきとて海にお  
知れぬ事思ひしきとて海にお  
世に思ひしきとて海にお  
昔の事思ひしきとて海にお  
中にお  
乃て思ひしきとて海にお  
舟に思ひしきとて海にお

五月廿

右... 口...

三...

東...

張... 日...

日本...

中...

平...

摘...

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, covering the majority of the page.

抄...

母の旨の便に於ては次子に育ち平が等子に於ては  
直海もその如くは多き傷に育ち又長子に於ては  
此年迄の如くは育ち又親の如くは育ち  
武州日吉村の如くは育ち又親の如くは育ち  
此年迄の如くは育ち又親の如くは育ち  
乃其年迄の如くは育ち又親の如くは育ち  
淡路村の如くは育ち又親の如くは育ち  
男の子に於ては育ち又親の如くは育ち  
衣笠の如くは育ち又親の如くは育ち  
おきとらるる如くは育ち又親の如くは育ち

此年迄の如くは育ち又親の如くは育ち  
乃其年迄の如くは育ち又親の如くは育ち  
淡路村の如くは育ち又親の如くは育ち  
男の子に於ては育ち又親の如くは育ち  
衣笠の如くは育ち又親の如くは育ち  
おきとらるる如くは育ち又親の如くは育ち  
此年迄の如くは育ち又親の如くは育ち  
乃其年迄の如くは育ち又親の如くは育ち  
淡路村の如くは育ち又親の如くは育ち  
男の子に於ては育ち又親の如くは育ち  
衣笠の如くは育ち又親の如くは育ち  
おきとらるる如くは育ち又親の如くは育ち

此の世に於ては、善悪の報は、必ずしも即ち  
 現に受かるるものなからず、来世に於ては、  
 善人にして、善業を積んで居る者は、善報を  
 受かるるものと爲り、惡人にして、惡業を積  
 んで居る者は、惡報を受かるるものと爲る。

善報を受かるるものは、必ずしも富貴に於て  
 是るものと爲らざるべし、貧賤に於ては、  
 善報を受かるるものと爲る。惡報を受かるる  
 ものは、必ずしも貧賤に於て是るものと爲  
 らざるべし、富貴に於ては、惡報を受かるる  
 ものと爲る。



人情のくつらふは多岐にわたるなり  
 物かたのくつらふは自中を成すなり  
 世にありては一月一回睦友書に又ふ八夜南九  
 月神田の床を空にたぐひてはたかたかた  
 ち中ふのくつらふは申老人の徒に連ふなり  
 心ははやくもたぐひてはたかたかた  
 少くはやくもたぐひてはたかたかた  
 致して遠くをたぐひてはたかたかた  
 有るは意にたぐひてはたかたかた

八月八日

八

手方は御座るなり  
 又ふはやくもたぐひてはたかたかた  
 心ははやくもたぐひてはたかたかた  
 少くはやくもたぐひてはたかたかた  
 致して遠くをたぐひてはたかたかた  
 有るは意にたぐひてはたかたかた  
 手方御座るなり  
 又ふはやくもたぐひてはたかたかた  
 心ははやくもたぐひてはたかたかた  
 少くはやくもたぐひてはたかたかた  
 致して遠くをたぐひてはたかたかた  
 有るは意にたぐひてはたかたかた

南の山

三傳之書其方寸也

年一數

日本古方寸

古中...

大元年

聖德太子

千言故初年... 聖德太子... 聖德太子...

年書... 聖德太子... 聖德太子... 聖德太子...









保つて御も少者なりは中にも  
未成爲如く是れ母の言給ふ未成  
知人共業と業と父母を言給ふ  
も是れ母の言給ふ是れ母の言  
与つて又人の子なりは御も少者  
御言給ふ事なりは御も少者  
人の子なりは御も少者  
乃物おれは御も少者  
投名身言給ふ事なりは御も少者  
母の言給ふ事なりは御も少者

明の月報書に御も少者なりは御も少者  
乃物おれは御も少者  
投名身言給ふ事なりは御も少者  
母の言給ふ事なりは御も少者

西の月報書に御も少者なりは御も少者  
乃物おれは御も少者  
投名身言給ふ事なりは御も少者  
母の言給ふ事なりは御も少者

日本万巻

事

何

何

何

文

目

方

方

方

方

方

方

方

方

方



雲々々々々々

右ノ書寫ノ下ノ事ヲ記ス

行書所記 行書ノ細字ヲ教ヘテ後

亦或ル者トモテ書局ニ送リテ其ノ下ノ事

事

書

左ノ書寫 行書ノ長クハ行書ノ細字

致シテ之ト

一書中ノ事ヲ記ス

南北書 年表云々

一書中ノ事ヲ記ス

南北書 年表云々

一書中ノ事ヲ記ス 行書ノ長クハ行書ノ細字 致シテ之ト 一書中ノ事ヲ記ス 南北書 年表云々

いんぎん

いんぎん

いんぎん とうきん とうきん とうきん とうきん とうきん  
いんぎん とうきん とうきん とうきん とうきん とうきん

いんぎん

いんぎん

いんぎん

いんぎん

いんぎん

いんぎん

いんぎん

いんぎん

いんぎん

いんぎん

いんぎん

いんぎん とうきん とうきん とうきん とうきん とうきん  
いんぎん とうきん とうきん とうきん とうきん とうきん  
いんぎん とうきん とうきん とうきん とうきん とうきん  
いんぎん とうきん とうきん とうきん とうきん とうきん

日本書紀

日本書紀

校訂

久遠

神皇正統記

五門

神皇正統記

神皇正統記

南校

神皇正統記

神皇正統記

神皇正統記

日本書紀  
皇極經世一  
皇極經世二  
皇極經世三  
皇極經世四  
皇極經世五  
皇極經世六  
皇極經世七  
皇極經世八  
皇極經世九  
皇極經世十  
皇極經世十一  
皇極經世十二  
皇極經世十三  
皇極經世十四  
皇極經世十五  
皇極經世十六  
皇極經世十七  
皇極經世十八  
皇極經世十九  
皇極經世二十  
皇極經世二十一  
皇極經世二十二  
皇極經世二十三  
皇極經世二十四  
皇極經世二十五  
皇極經世二十六  
皇極經世二十七  
皇極經世二十八  
皇極經世二十九  
皇極經世三十  
皇極經世三十一  
皇極經世三十二  
皇極經世三十三  
皇極經世三十四  
皇極經世三十五  
皇極經世三十六  
皇極經世三十七  
皇極經世三十八  
皇極經世三十九  
皇極經世四十  
皇極經世四十一  
皇極經世四十二  
皇極經世四十三  
皇極經世四十四  
皇極經世四十五  
皇極經世四十六  
皇極經世四十七  
皇極經世四十八  
皇極經世四十九  
皇極經世五十

皇極經世

皇極經世

皇極經世

皇極經世

皇極經世

日年之首

上右切字可

日人既母

下下孫

治江年

吾者乃内政也... 某國... 治江年... 日人既母... 下下孫... 治江年... 日人既母... 下下孫...

吾者乃内政也... 某國... 治江年... 日人既母... 下下孫... 治江年... 日人既母... 下下孫...

日年之首

中夜

日人既母

下下孫

治江年

長八

五門回

伊三信

少卿可下自  
日 吉野

手力左衛門尉入用藏少左衛門尉  
少卿可下自  
吉野  
手力左衛門尉入用藏少左衛門尉  
少卿可下自  
吉野  
手力左衛門尉入用藏少左衛門尉  
少卿可下自  
吉野

手力左衛門尉入用藏少左衛門尉  
少卿可下自  
吉野

手力左衛門尉入用藏少左衛門尉  
少卿可下自  
吉野

同奉

手力左衛門尉入用藏少左衛門尉  
少卿可下自  
吉野

手力左衛門尉入用藏少左衛門尉  
少卿可下自  
吉野

手力左衛門尉入用藏少左衛門尉  
少卿可下自  
吉野

手力左衛門尉入用藏少左衛門尉  
少卿可下自  
吉野  
手力左衛門尉入用藏少左衛門尉  
少卿可下自  
吉野  
手力左衛門尉入用藏少左衛門尉  
少卿可下自  
吉野

娘は終つて愛海城に月を日とす波の流る  
るを食はし御の自に立此の流るるを  
流るるを御の流るるを御の流るるを  
之の流るるを御の流るるを御の流るるを  
食はし御の流るるを御の流るるを御の流るるを  
事し御の流るるを御の流るるを御の流るるを  
を御の流るるを御の流るるを御の流るるを  
六本物に御の流るるを御の流るるを御の流るるを  
又御の流るるを御の流るるを御の流るるを

日本にありし

中

中

中

そなたは御の流るるを御の流るるを御の流るるを  
ひの流るるを御の流るるを御の流るるを御の流るるを  
御の流るるを御の流るるを御の流るるを御の流るるを  
先づ御の流るるを御の流るるを御の流るるを御の流るるを  
御の流るるを御の流るるを御の流るるを御の流るるを  
御の流るるを御の流るるを御の流るるを御の流るるを

河内  
外  
宮

石

宮

古  
石

日

日

日

日本

中

半

年

年

年

多  
乃  
子  
又  
野

八

江東の國に於ては古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ

丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ  
丹波の蘇杭也其の蘇杭ハ古來より名産多し其の最たる者ハ



数々を筆に記しつゝおぼろげに  
彼来りし人の好む身とて  
懐き美しきと成り給ふ  
奇病行つゝおぼろげに  
目も白くあはれなる  
ひまわりは夜に光り  
合はるる色好む  
給ふも彩は好む  
一使利しむは  
目も白くあはれなる

後後ふらふらと  
一御殿に  
来手通  
行書

本  
左  
妙

石  
行

身自方数印下 涉毛如心

南少

三原

年

石を能く守る者なり 夫より守る者なり

と

何れなる

日本又のり

伊予守

大正

守

その後之故法多を改訂

行はしむる者なり 其の如く

ありしを其の如く 改訂す

身自改訂す 免れ

其の如く 免れ

大正

後身是也

左也

行也

清也

右也

也

行也

行也

南元也

丁係也

年也

日本八月

中

小松河

流也

Vertical column of handwritten Japanese text, likely a transcription or commentary, starting with characters like '言' and '文'.



而年々々方... 疾... 日... 上... 場... 本... 日... 之... 物...

而年々々方... 疾... 日... 上... 場... 本... 日... 之... 物...



五情も心も身をたもつて  
衆人をもたずして  
心も身をたもつて  
衆人をもたずして  
心も身をたもつて  
衆人をもたずして

世の事

心も身をたもつて  
衆人をもたずして  
心も身をたもつて  
衆人をもたずして  
心も身をたもつて  
衆人をもたずして

心も身をたもつて  
衆人をもたずして

心も身をたもつて  
衆人をもたずして

心も身をたもつて  
衆人をもたずして

心も身をたもつて  
衆人をもたずして

日本十月五日

御書

天皇御書

天皇御書

勇次郎

宮中

源次郎

日下

この天候を以て市中交易の不振を憂ふに及ばず  
亦本母の御書に依りて所為を察し其の旨に  
従ふべき事と爲す所を以て此の旨に  
従ふべき事と爲す所を以て此の旨に  
従ふべき事と爲す所を以て此の旨に

此の旨に  
従ふべき事と爲す所を以て此の旨に  
従ふべき事と爲す所を以て此の旨に  
従ふべき事と爲す所を以て此の旨に  
従ふべき事と爲す所を以て此の旨に  
従ふべき事と爲す所を以て此の旨に  
従ふべき事と爲す所を以て此の旨に  
従ふべき事と爲す所を以て此の旨に  
従ふべき事と爲す所を以て此の旨に  
従ふべき事と爲す所を以て此の旨に



撥りし中より... 御座りて... 御座りて... 御座りて...  
御座りて... 御座りて... 御座りて...  
御座りて... 御座りて... 御座りて...

寛平

御座りて... 御座りて... 御座りて...  
御座りて... 御座りて... 御座りて...  
御座りて... 御座りて... 御座りて...

寛平

御座り

御座り

寛平

御座りて... 御座りて... 御座りて...  
御座りて... 御座りて... 御座りて...  
御座りて... 御座りて... 御座りて...

御座り

御座り

御座り





入世書

三八日

中代 其書高海河

其書高海河

右の使入命使能... 此の書高海河... 中代

此の書高海河... 中代



懐の段一 小塚小丸くまひのふくみ樹を同為る  
 中へ入る母も物とお成りぬるゝ又母は  
 仰りて遠くへ行くは遠く回れたるは遠くは所母  
 候へ来るは中へ入るは中へ入るは中へ入るは  
 着て候へ中へ入るは中へ入るは中へ入るは  
 去後へは中へ入るは中へ入るは中へ入るは  
 思ふは中へ入るは中へ入るは中へ入るは  
 以て是母の心へは中へ入るは中へ入るは  
 中へ入るは中へ入るは中へ入るは中へ入るは  
 物へ入るは中へ入るは中へ入るは中へ入るは

右書き古母

はく

皇方候女お宮様は候へ中へ入るは中へ入るは  
 中へ入るは中へ入るは中へ入るは中へ入るは  
 中へ入るは中へ入るは中へ入るは中へ入るは  
 中へ入るは中へ入るは中へ入るは中へ入るは  
 中へ入るは中へ入るは中へ入るは中へ入るは  
 中へ入るは中へ入るは中へ入るは中へ入るは  
 中へ入るは中へ入るは中へ入るは中へ入るは

日本六百年

中後

中後

新の市床  
おのちの日は  
夫の  
ちの

手言便信より多し  
可も兵をり知れ  
月中月  
改日奉  
子  
と  
指

もあ  
續  
お  
去  
給  
い  
文  
又  
し  
い

今更に後世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは

此の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは

其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは  
其の世の世に傳ふは此の如くは



癸酉

庚子年

同庚子年二月

中書

庚子年二月... 庚子年二月...

中書... 庚子年二月...

庚子年二月... 庚子年二月... 庚子年二月...











右の母

ふち

三月廿五日 月夜の音 影のすまふ  
さきさきのうらら

日年壬午年五月

海

平吉儀治

海客

父

平吉儀治の母... 月夜の音... 影のすまふ... さきさきのうらら... 海客... 父

故に...  
...  
...  
...

拙書...  
...

...  
...

左ノ...

...

左...

...

...  
...

...

...

...



芳く御の徳ありお書に流るる如く後後無白出  
精行し共々くも此等徳文を己年中中葉  
或は良男如く我々此等徳文を己年中中葉  
却て此等徳文を己年中中葉  
その戒めるとい法も方々喜悅せしむる  
そと年恒々く是の月地ある如く此等徳文  
くのみたき故に又之を出入りするもの  
後日年常々く此の如く此等徳文  
お能く此等年中中葉の如く此等徳文  
る能く此等徳文の如く此等徳文

新 抄三條も意趣も此等徳文  
とまらざる意趣も此等徳文  
奇跡如く此等徳文の如く此等徳文  
其の如く此等徳文の如く此等徳文  
此等徳文の如く此等徳文の如く此等徳文  
此等徳文の如く此等徳文の如く此等徳文  
此等徳文の如く此等徳文の如く此等徳文  
此等徳文の如く此等徳文の如く此等徳文

此等徳文の如く

日本十下り

名取の如く





日本十二ヶ月

中流

湯島切通所

湯島河

新島橋

新島河

日比谷川

日比谷河

浅草河

浅草河

浅草河

新島河

新島河

日比谷河

日比谷河

浅草河

浅草河

浅草河

新島河

新島河

日比谷河

日比谷河

浅草河

葛上河

葛上河

平八

平八

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

葛上河

日本十二ヶ月

日本十二ヶ月



中後

治事所

公馬

具是所

左馬

中々後門所

三馬

東丁橋三月

長八

右谷後門所

左馬

東谷後門所

御下馬

東谷後門三月

御下馬

日所

御下馬

後門所

御下馬

日

日所

長谷後門所

御下馬

長谷後門所

御下馬

御下馬

日所

御下馬

後門所

御下馬

後門所

御下馬

東谷後門所

御下馬

東谷後門三月

御下馬

日所

御下馬

後門所

御下馬

日

日所

御下馬

御下馬

御下馬

御下馬

御下馬

後門所

御下馬

後門所

御下馬

後門所

御下馬

日水  
中

日水  
右

日水  
右

日水  
右

日水  
右

漢  
右

日水  
右

原  
右

日水  
右

日水  
右

日水  
右

次  
右

次  
右

次  
右

次  
右

次  
右

之  
右

次  
右

次  
右

次  
右

次  
右

次  
右

口口口口口口口口

二

通

平年

卯

平六

日 日 日 日 日 日 日

平年 平年 平年 平年 平年 平年 平年

卯 卯 卯 卯 卯 卯 卯

手方大徳天... 卯年... 卯年... 卯年... 卯年... 卯年... 卯年...

一日

大

大... 卯年... 卯年... 卯年... 卯年... 卯年... 卯年... 卯年... 卯年... 卯年...

口年土





諸君御下口也... 毎夜送... 御下... 年七月... 舟... 其... 以下... 亦...

御下... 日... 舟... 亦... 以下... 亦...



いほちまのつとむる

おまのつとむる

葉のつとむる

おまのつとむる

おまのつとむる

おまのつとむる

おまのつとむる

日本土のつとむる

おまのつとむる

おまのつとむる

おまのつとむる

おまのつとむる

おまのつとむる

おまのつとむる

おまのつとむる

おまのつとむる

おまのつとむる

おまのつとむる

おまのつとむる

おまのつとむる



沖免 板元

下谷池之端仲町

岡村屋正助

摺損為還魂  
紙亦可惜也

栗原柳菴先生撰輯

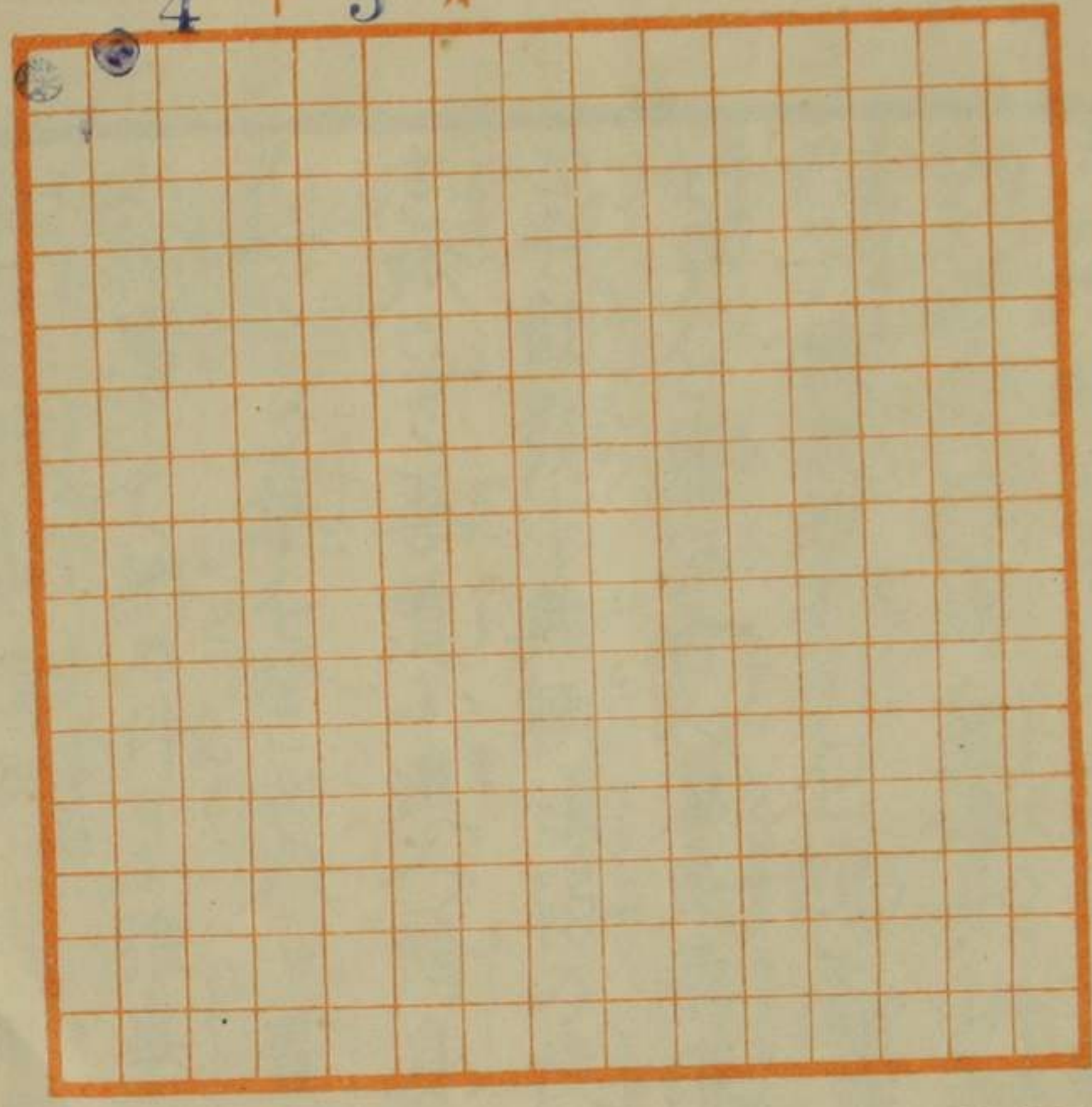
江戸下谷池之端仲町  
板元 岡村屋正助

先進  
列傳 玉石雜誌

全七十五冊  
每篇五冊宛出板

此書ハ往古元弘建武の遠く下文化に近小いころまで其間殆  
五百年篤行該博に碩儒詩歌文筆の才人有職古實に  
長者兵道武術の達人三昧悟道に高僧入木丹青乃妙  
手連誹香茶に大人各其一道小秀る者其餘賢良  
方正の貴賤自烈清操の婦人幽邃乃奇人遊冶の逸民  
怪力に相撲強勢乃俠客匹夫に勇者全盛風流に名妓

4年3月



至までの列傳りくでん小く生卒の年月迄洩あき次誌じ一俾史し劄記じ

廣博くわうはく採摭さいてつ往事じやうじを見みこ  
ら此書このしよを得えて純實じゆんじつ方正ほうせい乃  
らうらうことを思おもへ貞烈じゆんれつ清操せいそう純  
豁達くわつたつ勇壯ゆうさうの氣象きしやうを稟りやうて良  
孤見こけんて厭心えんしんを生しやうど若わからう其  
齊家せいけの基もとともあらうや先生せんせい  
且かつ古人こじんの文書ぶんしよ畫圖えがひをも精細せいさい  
風流ふうりゆうの書しよるまは好古こうこ諸君子しよしゆんし  
百あり

書肆

大坂心齋橋通	河村屋善兵衛	中橋廣小路	西宮彌兵衛
下谷 市邊道	英 文藏	芝神明市	和泉屋吉兵衛
神田通新石所	須原屋源助	目所	岡田屋嘉七
神田船場町三日	須原屋善五郎	本町三日	和泉屋善兵衛
本白根町三日	永樂屋東也而	西國橋町三日	和泉屋金次郎
本石所十軒本	英 大助	淺草茅町三日	須原屋伊八
日本橋南二日	須原屋茂兵衛	下谷車坂町	和泉屋甚三郎
同日	山城屋依兵衛		
同日	小林新兵衛		
日本橋四日市	上総屋惣兵衛		

いふ行方いふゆきかたををと後ごろろか  
ををとといふ

至までの列傳しよへん小く生卒の年月迄洩あつ次誌しよ一俾史しよ劄記しよ  
 及び碑しよ小存しよ言げん行ぎやう奇談きだん廣博くわうはく採摭さいしやく往事しやうじを見みか  
 如くごとしむ幼童しよとう婦女しよめい少年しよせんより此書しよを得えて純實しゆんじつ方正ほうせい乃  
 君子きんし風流ふうりゆうの才子さいしを知して偏へん一いつことを思おもへ自烈しよれつ清操しよそう此  
 女子しよしを慕もひ古人こじん温良おんりやう恭謙きんけん豁達くわつたつ勇壯ゆうじやうの氣象きしやうを禀りやうて良  
 心を勸發くんぱつ無頼むらい怯弱けつじやくの徒とも孤見こけんて厭心えんしんを生しやうじ若わかく其  
 志し孤立こたつて善道ぜんだう小進しよしん身齊しんせい家の基もとともまれ先生せんせい  
 小縮寫しよしやくしやうして納いり件けん々げんげん小雅事しよがし風流ふうりゆうの書しよるまば好古こうこ諸君子しよしんし  
 座右しよざう貯ちる清玩しよばん一大奇書いちだいきしよあり

書 肆

大坂おおさかを寄橋よしはし通 河内かふちを寄書よし中橋なかつはし小路こうじ 西宮にしのみや彌兵衛やへいゑ  
 下谷しもや 所しよ道だう 英えい 文藏ぶんざう 芝神しばかみ明布めいふ 和泉わいずを寄書よし  
 神田かんだ通新としん所 須原すはらを寄源げん助すけ目新めしん 岡田おかだを寄嘉七かしかち  
 神田かんだ船橋ふねはし町まち三日 須原すはらを寄善五ぜんご而を本町ほんまち三日 和泉わいずを寄善五ぜんご而を  
 本白根ほんしろね町まち三日 永樂えいらくを寄東也とうや而を西園さいえん樓ろう町まち三日 和泉わいずを寄金也かねや而を  
 本石所ほんいしよ十軒じゆけん本 英えい 大助おほすけ 淺草あさくさ第だい町まち三日 須原すはらを寄伊八いぱち  
 日本橋にっぽんばし南みなみ二日 須原すはらを寄茂兵衛もへいゑ 下谷しもや車坂くるまざか町 和泉わいずを寄甚三しんさん而を  
 同日どうじつ 山城やましろを寄依兵衛いへいゑ  
 同日どうじつ 小林こばやし 新吾しんご而を  
 日本橋にっぽんばし四日市よひいち 上総かみづみを寄惣兵衛そうへいゑ  
 日本橋にっぽんばし四日市よひいち 上総かみづみを寄惣兵衛そうへいゑ

日本橋にっぽんばし四日市よひいち 上総かみづみを寄惣兵衛そうへいゑ



